

平可夫
アブダビ

中露間で合意された「SU-35 戦闘機に関する確認協議」に関して、ハイレベルのロシア外交官及び軍事工業界のメンバーは、KDR に対し次のように述べた。「これは實際上政治協議である。如何なる国家においても、重要な武器輸出は政治そのものである」と。

中国側から見れば、習近平外交は、ロシアを優先し、米国・日本・インドによる中国包囲網の打破を狙っているのは明らかだ。クレムリンから見れば、運命を共にしているとの考えがある。”中国は政治的にロシアを必要としており、中国はロシアが徹底して西寄りになることを希望しない” スホーイ航空機会社の官員はこのように述べた。しかしプーチンが再び大統領になると、西側との関係は冷却し、このことからロシアは中国が必要になった。プーチンは、就任以来、G8 会議に未だ出席していない。西側は、プーチンの大統領再任に対し冷淡な態度を採っており、再任の合法性を黙認することなく疑っている。このような状況下で、中露が再び親しく接近したが、最も重要な部分は当然軍事協力である。したがって西側、特に米国の対露政策の失敗がモスクワと北京の再接近を招いたのである。

KDR は次のように予測する：クレムリンが SU-35 戦闘機の対中輸出に同意することは、中露の軍事協力を再び盛んにする可能性がある。これは政治であって単にエンジンが何台とかの話ではない。クレムリン及び中南海は、この問題を様々な角度と高さから見ており、全世界を視野に入れている。中国によるロシア製武器のコピー問題は、ロシア軍事工業界が如何に重大視したとしても、プーチンにとっては些細な問題に過ぎない。一部の過去の未解決問題或いはロシアが単一での輸出を望まない新型武器システム、例えば S-400 型地对空ミサイルは、今後 SU-35 及びその他の武器と同様に中国への輸出が許可される可能性が極めて高い。AMAZ ANTEY ミサイル集団会社は、アブダビで開かれた IDEX 2013 に S-400 の模型を展示した。これは国外展示としては最初であり、すでに輸出許可を得ていることを意味する。

ロシアは続々と S-400 型 SAM を配備している。極東の S-400 は現在北朝鮮の弾道ミサイル対処であるとされているが、配備場所は露朝国境から遠くない地

区である。S-400は、中国が現在最も獲得を希望しているロシア製SAMであり、射程は250 KMに達し、このSAMを獲得すれば攻撃範囲は台湾海峡北部を完全にカバーするだけでなく、台北上空を含む北部台湾の陸地の大部分をカバーする。

一方、中国がSU-35及びS-400を輸入することによって、中国航空工業及び地対空ミサイル工業が弱体であり、平素はデマを吹聴するが、実際は依然ロシアの工業技術から学び取る生徒レベルであることを外界に知らしめることになる。高性能航空エンジン、射程150 KM以上のSAM、航空機搭載フェーズド・アレイ・レーダーなど、中国は全て研究段階、試験段階にあるに過ぎない。真に成熟した技術はロシアにある。この点について、本誌は、いずれ中国がロシアの軍事工業界の教えを請うようになるであろうことを予測していた。再び生徒の身分になるが、もはや小学生でもなければ中高生でもない。そのレベルは大学低学年レベルである。

SU-35の輸入は、本誌の情報収集及び掌握した結論を別の角度から証明した。すなわち巨大な資金を注入してコピーしたJ-11（SU-27のコピー）及びJ-16（SU-30MK2のコピー）は中国空軍を満足させることができなかった。そうでなければ独力で中国版SU-35を複製するはずだ。中国空軍は、”瀋陽スキー戦闘機”に満足しなかったのだ。これは軍内の公然の秘密である。そうでなければ、なぜ中国空軍の”じゃじゃ馬娘”SU-30MKKを東シナ海に飛行させて日本を威嚇したのだろうか？この機体はSU-30の（本来の性能を落とした）簡易版なのである。

新たな中露の軍事交流が活発化するにしたがって、中国軍が装備するロシア製武器は、改良・グレードアップに直面している。例えば1993年に輸入した2艘のVASHAYANKA 877 KILO型潜水艦、1999-2003年に輸入した100機のSU-30MKK/MK2戦闘機、1998-2001年に輸入した4艘の956E/EMミサイル駆逐艦等の装備品の改良は、今すぐ計画しなければならない。これらの武器は中国軍が装備してから瞬く間に10-15年が過ぎた。一部の武器はそれ以上の期間が過ぎ、大規模改修が必要になっている。当時SU-30MKK/MK2と一緒に輸入した多数の空対地ミサイル、空対艦ミサイルは、すでに時代遅れになっている。ロシアは改良型を開発し、射程を延伸し、誘導方式も多様化させた。これらのロシア製武器の改良・グレードアップは、武器を保有しているロシアの参加、特にスホーイ集団の参加が不可欠である。

露印、中露の軍事協力において、ロシアは長年にわたってインドを偏重し寵愛してきた。今後とも地縁政治、軍事戦略上の必要性から、ロシアがインドを重視する基本的姿勢に大きな変化はないであろう。しかし現在否定出来ないことは、中露の軍事協力関係が回復発展すると同時に、露印の軍事協力が西側国家から挑戦を受け始めていることである。ニューデリーは、西側の寵児として軍事装備品市場を西側国家に蚕食されつつある。インドは初めて米国から P-8I 型対潜哨戒機、C-17 輸送機を輸入し、またアパッチ型武装ヘリの輸入契約をしようとしており、フランスのラファール戦闘機を追加輸入しようとしている。もし、今後 5 年間にロシアが SU-35 等の装備を中国に輸出できたならば、中露の軍事貿易額は、再度 1 位 2 位の地位に上る可能性がある。

最近一時期におけるインドの主流マスメディアの報道は、露印の軍事協力に対する態度が偏っており、今年のバンガロール・エアショーでの報道で明確になった。

すなわち：“インドは新しい友人と交流する”” ロシアの武器は逐次西側に取って代わられる”等々の見出しである。ロシア軍事工業界の担当者は不満であり、インドで記者会見を行った。インドと本誌の記者だけが招待され、ロシアの記者は排除された。

”我々は不満だ。インドのマスメディアの報道は偏っている。”

”我々に何でも聞いてくれ。我々は米国よりもオープンだ。”

”我々は何でも話したいと思っている。貴方方の軍事機密だろうと条約の制限があろうと何でも話したい。”

”我々は、壮大なインドの軍事企業を発展させた。そして惜しげもなく最先端技術に移転させた。米国はインドにどんな軍事技術に移転したというのか？輸入した米国装備をインド国内の他国の装備品に如何に整合させようというのか？”

記者会見は双方が激論した。

総合的に述べると、SU-35 戦闘機が中国に輸出されようとされまいと、中露の政治的接近は現実となっている。

以上